

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：32305

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2023

課題番号：18K10444

研究課題名(和文) 看護職者の学習ニーズを反映した小児在宅看護教育プログラムの構築

研究課題名(英文) Development of a Pediatric Home Care Nursing Continuing Education Program Reflecting the Learning Needs of Nursing Professionals

研究代表者

櫻井 美和 (Sakurai, Miwa)

高崎健康福祉大学・保健医療学部・准教授

研究者番号：10404922

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：小児在宅・在宅移行支援に関する看護師の学習ニーズとして、対象理解、医療的ケア、社会資源、安楽や成長・発達を考慮した日常的ケアに関する基本的知識・技術のみでなく、多職種連携チームの中で役割遂行するための方策、在宅で療養する子どもと家族を中心としたケアリングが抽出された。また、講義形式の研修のみでなく、体験・実習型研修、学びの共有型研修、e-learningを導入することへの学習ニーズも有していた。従来の基本的知識・技術に関する知識提供型の講義のみでなく、個々の子どもと家族に応じた実践知と実践能力の修得を旨とした多様な教育方法を適用した教育プログラムを構築することの必要性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の最終的な目標は、小児在宅看護に関する看護師の学習ニーズおよび教育ニーズを研究的に明確にし、その上で学習する側と教育する側のニーズの乖離を最小限にし、双方のニーズを充足させた教育プログラムを構築することである。その第一段階として、小児在宅看護に関する看護師の学習ニーズを明確にし、看護継続教育プログラム構築への示唆を得るために実施する。本研究により、小児在宅看護人材育成に寄与する一助となる。

研究成果の概要(英文)：The learning needs of nurses regarding pediatric home care nursing and the transition to home care nursing were not only as "basic knowledge and skills regarding understanding of the patient and family, medical care, social resources, and daily care considering comfort and development" but also as "strategies to play roles within an interdisciplinary team" and "children and families centered care." Nurses also had learning needs for not only lecture-style training, but also experience/practice-based training, shared learning training, and the e-learning. The results suggest the need to develop a continuing education program for pediatric home nursing that applies a variety of educational methods aimed at acquiring practical knowledge and practical skills tailored to individual children and families, rather than just traditional lectures that provide knowledge about basic knowledge and skills.

研究分野：小児看護学

キーワード：小児在宅看護 看護師 学習ニーズ 看護継続教育プログラム

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

1) 小児在宅医療・看護の推進に向けた今日的課題

近年、日常的に医療機器や医療的ケアを必要とする子どもが急増している。さらに、高齢者を中心とした地域包括ケアシステムの推進に伴い、小児在宅医療・看護の必要性について提言され、平成25年より9都県で小児等在宅医療連携拠点事業が試行された。その成果から、小児専門医療機関、診療所、訪問看護ステーション等の施設間の連携体制の強化とともに、「在宅医療の人材確保・育成」の充実が今後の課題として挙げられている。また、診療報酬の改定がなされ、小児在宅医療に積極的に取り組んでいる医療機関や小児科のかかりつけ医機能を評価する点、超重症児等の小児を受け入れる訪問看護ステーションを評価する点が盛り込まれたことにより、一層の小児在宅医療・看護の推進とそのため体制整備が課題となっている。

一方、小児在宅看護の受け入れに関する実態調査では、「小児の受け入れを可能」とする訪問看護ステーションは、2~3割程度にとどまっている現状がある。また、小児の受け入れをためらう理由として「小児看護の知識不足」「小児看護の経験がない」こと、また小児を受け入れる条件として「小児看護の経験があるスタッフがいた場合」「小児を受け入れるための研修会等で知識を得られた場合」等が報告されている。このことは、今日的課題として小児在宅看護を担う人材確保・育成が急務であることを意味している。

2) 小児在宅医療・看護の特徴と看護職者に求められる看護実践能力

小児在宅医療・看護の特徴的現況として、重症心身障がい児数の増加と重症化、医療技術の進歩による子どもの障がいのあり方の変化（認知発達に問題はないが医療的ケアを必要とする子どもの存在等）、医療依存度の高度化、成長・発達に伴う病態や医療的ケアの変調・変容、異常を判断することの困難性、成長・発達を目指した支援の必要性、主養育者である親の医療者への要求水準が高いことによる医療者介入の困難性、終末期ケアにおける問題（親の病的悲嘆への対応等）が挙げられる。また、小児在宅医療・看護においては、コーディネータの役割を担う者が少ないことから、多職種連携チームにおける看護職者の役割は大きいと考える。さらに、在宅医療・看護を推進するために、入院当初からの在宅移行支援の充実とともに、終末期ケアや超・準超重症児へのケアも行えるような機能強化型訪問看護ステーションの開設等が提言されている。

上述のような小児在宅医療・看護の課題の多様化、複雑化を背景として、看護職者には、入院時から在宅看護の視点をもつこと、および子どもの病状や医療的ケアに関連した知識・技術のみでなく、多種・多様な知識を基盤とした、成人期や老年期にある対象とは異なる高度なアセスメント能力や看護実践能力を有しているが求められると考える。

3) 関連する国内外の研究動向

国内の小児在宅移行期支援や小児在宅看護に関連する看護教育に関する研究では、在宅看護の推進・阻害要因および研修活動の評価と示唆、施設間で看護師の知識と技術を共有することの必要性、現状と訪問看護師の困りごと、人材育成のための同行訪問と効果等について報告されている。しかし、学習者である病棟看護師、訪問看護師の小児在宅移行期支援や小児在宅看護に関する学習ニーズ、習得が必要な看護実践能力すなわち教育ニーズ、それら2側面のニーズを加味した教育プログラムに関する研究は実施されていない。一方、国外研究では、訪問看護師の学習ニーズについては研究されているが、日本と諸外国では文化的・社会的背景や看護師への看護基礎教育も異なっていることから、その研究結果を適用することには限界がある。

4) 小児在宅看護教育の現状とその充実の必要性

地域包括ケアシステムの構築に向け、高齢者や成人期にある対象者への在宅医療・看護に関わる人材育成研修プログラムが実施されている。一方、小児在宅医療・看護に関連した講習会も実施されているが、その教育内容は、小児在宅看護の現状や課題、福祉制度、医療的ケア技術、多職種連携等の断片的な内容に特化しており、教育する側の教育ニーズを重視した「教育ニーズ優先型プログラム」に特化している傾向にあると言える。また、学習する側である看護師や訪問看護師の学習ニーズ、研修プログラムを開催する側の教育ニーズを明確にした研究も存在しない。このような現状を鑑み、「学習ニーズ優先型プログラム」や、教育する側と学習する側の双方のニーズが反映されている教育プログラムを構築することが必要であると考えられる。

2. 研究の目的

本研究を基礎的研究として位置づけ、在宅移行期にある、または在宅で療養する子どもとその家族への支援に携わっている看護師、訪問看護師の小児在宅看護に関する学習ニーズの特徴を定性的に明確にし、小児在宅看護教育プログラムの作成への示唆を得る。

3. 研究の方法

1) 研究対象者

小児看護に携わっている病棟看護師や外来看護師、および訪問看護ステーション等に勤務する看護師であり、以下の条件を満たす者を研究対象者とした。

- (1) 在宅移行期にある、または在宅で療養する子どもとその家族への看護に携わった経験がある。
- (2) 研究協力と IC レコーダによる面接内容の録音、および記録に関して同意を得ている。

2) データ収集方法

(1) デモグラフィック・データ収集方法

デモグラフィック・データ面接ガイドに基づき、研究対象者の性別、年代、看護師経験年数、小児看護経験年数、職位、看護基礎教育課程、最終属学歴、看護師以外の専門職取得免許、小児在宅看護の経験、継続看護教育の機会等に関して、面接時に聴取した。

(2) 半構造的面接法

以下の内容について問う面接ガイドに基づき、30～60分程度の半構造化面接を実施し、ICレコーダに録音した。

内容

- a. 質の高い小児在宅移行期看護や小児在宅看護を実践するために『学習することが必要である』『学習したい』『習得したい』と考える知識・技術・態度。
- b. 小児在宅移行期看護や小児在宅看護の実践において、困難を感じた場面や出来事に対してその状況を解決するために『学習することが必要である』『学習したい』『習得したい』と考える知識・技術・態度。
- c. 小児在宅看護プログラム展開(プログラムタイプ、学習形態、学習時間数、開催日等)に関する要望。

データの信用可能性や確認可能性を確保するため、データ収集用紙に記録するとともに、必要に応じて研究対象者にそのデータ収集用紙を提示することによって、研究対象者の想起のしやすさ、語りやすさを重視した。また、データ収集用紙を用い、研究者と研究対象者間で語りの内容の真实性を確認しながら面接を進めた。

3) 分析方法

佐藤による質的データ分析法に基づき、以下の手順で分析した。

- (1) 面接で得られたデータから逐語録を作成し、逐語録より「小児在宅看護に関する学習ニーズ」等に関する文書セグメントを抽出し、脱文脈化した。
- (2) 脱文脈化した文書セグメントについて、「看護師は、質の高い在宅移行期支援や小児在宅看護を実践するためにどのような知識・技術・態度を『学習することが必要である』『学習したい』『習得したい』と考えているか」という問いをかけながら、学習ニーズの内容の類似性と相違性を検討し、定性的コーディングを進め、コードおよびカテゴリーを生成した。
- (3) 生成されたコードおよびカテゴリーを参照しながら、何度もオリジナルの脱文脈化した文書セグメントに立ち返り、コード名およびカテゴリー名の適切性を検討した。
- (4) 質的研究法に精通している複数の小児看護学による協議を行い、分析の妥当性と適切性を確保するように努めた。

4) 倫理的配慮

小児関連病棟を有する病院や小児専門病院、訪問看護ステーションの施設長等に研究協力を依頼し、協力への承諾を得た。その後、施設長等に、条件を満たす研究対象者を紹介していただいた。紹介していただいた研究対象者には、目的・方法・研究協力事項、個人情報保護、研究協力の任意性と撤回の自由、研究協力によって利益・不利益、および不利益を最小限にする方法、研究に関する情報公開、研究成果の公表等について、文書と口頭で説明し、同意書への署名をもって同意を得た。

本研究は、研究者が所属する倫理審査委員会の承認を得た。

4. 研究成果

収集したデータを分析し、以下のような結果を得た。

1) 小児関連病棟の看護師、訪問看護師の小児在宅看護に関する学習ニーズ

分析の結果、11の知識・技術・姿勢に関する学習ニーズとして3つのコアカテゴリ、11のサブカテゴリが生成された。

- (1) 対象理解、医療的ケア、社会資源、安楽や成長・発達を考慮した日常的ケアに関する基本的知識・技術

この学習ニーズの具体的な内容として、【在宅療養を必要とする子どもを育てる両親の心理特性】【科学技術の進歩に対応していくために必要な最新の医療機器とその操作方法】【日々変革する社会資源に関する最新の知識とその更新】【在宅で療養する子どもの統計的な推移】【障がいのある子どもの身体的な成長に伴う呼吸管理・ポジショニングに関する知識・技術】【在宅療養を必要とする子どもの家族との援助的関係を構築するために必要なコミュニケーション技法】【在宅療養を必要とする子どもの家族の心情に呼応する教育的支援方法】の7つの学習ニーズが包含されていた。

(2) 在宅療養する子どもと家族を支援する多職種連携チームの中で役割遂行するための方策
この学習ニーズの具体的な内容として、【在宅療養する子どもへの虐待に対応するために必要な知識・技術と多職種連携のあり方】【在宅移行に伴う問題の解決と円滑な在宅移行を目指した多職種連携チームの中でのメンバーシップと協働の方法】の2つの学習ニーズが包含されていた。

(3) 在宅で療養する子どもと家族を中心としたケアリング

この学習ニーズの具体的な内容として、【在宅療養する子どもと家族の医療・看護・福祉を基盤とした生活の予測的イメージ化】【在宅療養を必要とする子どもの家族に寄り添おうとする基本的姿勢】という2つの学習ニーズが包含されていた。

以上より、本研究で導かれた(1)～(3)の学習ニーズは、小児在宅看護継続教育プログラムの教育内容として包含する必要があることが示唆された。また、これらの学習ニーズのうち、【在宅で療養する子どもと家族の医療・看護・福祉を基盤とした生活の予測的イメージ化】に対する学習ニーズが高く、この結果を論じている先行研究は存在せず新規性のある結果である。この【在宅で療養する子どもと家族の医療・看護・福祉を基盤とした生活の予測的イメージ化】するための知識・技術・態度の修得を目指した教育の形態、教育方法、教育方略、教材を検討・開発する必要性が示唆された。

2) 研修会等の形態として、【病院-訪問看護ステーション連携に基づく体験・実習型研修】【事例への看護実践についての共有型研修】【ライフワークバランスを考慮したe-learning】等を導入することへの学習ニーズがあった。知識提供型の講義形式ではなく、看護師間での学びの深化を目指した協同学習や、利便性の高い学習機会等、多様な形態で学習できる機会を保障することの必要性が示唆された。

3) 分析過程で『看護師は在宅移行期にある子どもと家族への看護において多様な困難感を抱いている』『困難感を抱いてはいるものの必ずしも学習ニーズとして意識しているわけではなく、困難を試行錯誤し、解決を試みながら経験知を蓄積している』という看護師の学習プロセスも明確になった。このことから、知識提供型の講義のみでなく、個々の子どもと家族に応じた実践知と実践能力の修得を目指した多様な教育方法を適用した小児在宅看護継続教育プログラムを構築することの必要性が示唆された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	星野 美穂 (Hoshino Miho) (00352617)	高崎健康福祉大学・保健医療学部・講師 (32305)	
研究分担者	松崎 奈々子 (Mathuzaki Nanako) (60761781)	高崎健康福祉大学・保健医療学部・助教 (32305)	2018～2020年まで
研究分担者	今井 彩 (Imai Aya) (10826019)	高崎健康福祉大学・保健医療学部・助教 (32305)	旧姓：今井 現在の姓：山崎

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関